

Argentina

社団法人 日本アルゼンチン協会 会報

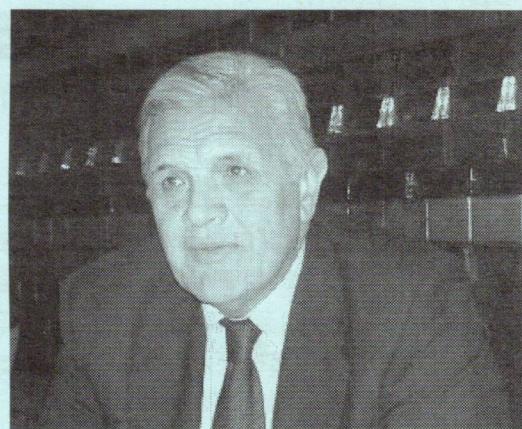
2003年4月

アルゼンチン危機の真相 1	サルミエントと福沢諭吉 6
最新アルゼンチン情勢 2	抱きしめて タンゴ 7
友好70年 長田小学校とアルゼンチン 4	南極圏到達記 8・9
旅の指さし会話帳、言葉の手引き 4	熱狂のコスキン・フェスティバル 10
インタビューこの人 コラチ・ペロン党青年部代表... 5	破産した国家での生活と将来 11

ホルヘ・カストロ氏に聞く

アルゼンチン危機の真相

外務省の招聘で来日したアルゼンチンの著名なエコノミスト、97～98年に企画庁長官を務めたホルヘ・カストロ氏からアルゼンチン危機の要因などを聴取した。同氏は詳細な経済分析に基づき①アルゼンチン経済のファンダメンタルズは決して悪くない。中南米ではむしろ最優等生だ②いまの危機は政治的なもので内外の信用失墜によることに尽きる、とつぎのように興味深い意見を述べた。



アルゼンチン危機の理解の仕方で、アルゼンチンのエコノミストは2派に分かれる。

第1のグループはムルフィー、ブローディーなどで、兌換法^{注1}による固定相場制の下では経済が低成長になると公的債務が増大し経済が破綻すると主張、危機の要因をもっぱら経済モデルであると言う。

第2のグループはカルボ、アビラ、カストロなどで、兌換法の下での二重通貨制度は取引通貨の選択肢を与え、カントリーリスクが高まるとドルを選択、リスクが低下するとペソを選択、通貨の選択肢は経済の安定に寄与する。危機の原因は政治リスクに起因すると主張する。

アルゼンチンの国民性、移民社会、文化、タンゴなどの社会的・文化的側面から危機を理解しようとする向きもあるが正しくない。97～98年の成功を実現した時代と、危機の現在とでアルゼンチンの社会・文化は何も変わっていないからだ。

デ・ラ・ルア政権（急進党とフレパソの連立政権で主要3州のブエノスアイレス州、コルドバ州とサンタフェ州の知事は野党ペロン党）、デ・ラ・ルア大統領の辞任、ロドリゲス・サア暫定大統領、エドワルド・カマニョ臨時大統領、ドゥアルデ政権（ペロン党政権だが選挙による政権樹立までの移行政権）と頻繁な政権交代、政治不

安、脆弱な政権基盤、正当性の問題、上院疑惑など、政治危機で内外の信認を失った。危機脱出には強固な政治権力とそれに支えられた制度の構築により内外の信認を回復することだ。アルゼンチン国民の手中には、90年代の経済成長で蓄えたドル紙幣が350億ドルあるが、これはマネタリーベース（通貨発行高と銀行の中銀預け金の合計）と擬似通貨たる州債の合計の300億ドルを超える。信認が回復すればこのドル紙幣は金融システムに戻り経済活性化に寄与するだろう。

アルゼンチン経済のリセッションは98年8月のロシア危機の波及で始まった。ブラジル通貨の切下げ(99年1月)は深刻な通商問題を齎しはしなかった。2000年の当初経済予測は、世界経済の成長予測もありアルゼンチン経済の成長率は4%がコンセンサスであった。世界貿易レベルを上回るアルゼンチン輸出の伸び、全国銀行預金870億ドル、外貨準備320億ドルを記録した。しかし、99年第4半期に回復を示し始めた経済は、2000年に入ると世界経済の減速、アルゼンチンに対する信認の低下からカントリーリスク・プレミアム^{注2}が急上昇、国際資本市場での資金調達が困難となり、マイナス成長へと転落した。アルゼンチンばかりか中南米諸国の経済成長率は外資流入額と相関関係にある。100億ドルと云われて

いる99年の財政赤字は歳出削減を実施し歳出の増大はなかったが、経済活動の落ち込みによる間接税と輸入関連税収の大幅減少の結果である。給与削減など2度に亘る歳出削減、増税を実施した。

2000年のIMFによる大型国際金融支援400億ドルの経済効果は、わずか2ヵ月にとどまり、アルゼンチンのカントリーリスク・プレミアムは再び上昇した。2001年には短期間に3人の経済大臣、カバロ経済大臣による中銀総裁ロケ・フェルナンデスの更迭、マカロネ総裁の就任など政治・政策・制度に対する信認が一層低下した。それは2001年10月の選挙で棄権と無効票の率40%に反映された。

繰り返しになるが、アルゼンチン危機は政治危機の結果、内外の信用を失墜したことが原因であり、危機脱出には正当性を持った強固な政権とそれに支えられる制度の構築が必要だ。それさえ実現できれば、危機回避の蓋然性は中南米諸国のうちで最も高い。

注1 中銀の通貨発行高に外貨準備の裏づけを与え、ペソを米ドルと1対1で交換を保証した法律(91年4月1日施行)。この結果、ペソの信認が確立され、インフレは終息、米ドルは法定通貨ではないが国内取引、日常生活で多く使用されるようになり、経済のドル化が進んだ。

注2 アルゼンチンの米ドル建て国債の利回りと同じ期間の米国財務省証券の利回りの差で、カントリーリスクの指標となり、アルゼンチンが新規国債を発行する際の金利となる。

(聞き手は小林晋一郎、当協会理事)

■ドキュメント

最新アルゼンチン情勢

政治・経済の主な出来事(4月11日現在)

塩見 憲一

IMFとの暫定融資プログラム合意で国際金融機関との問題に一息つき、目下の関心は大統領選挙の成り行きに移っている。5月に発足する新政権にとってはIMFとの本格的な支援交渉、民間債権者との債務交渉など引き続き難題を抱えた船出となり、経済再生に向けてどのような舵取りをするのが注目される。

「IMFとの支援交渉状況」

1月16日、アルゼンチン政府はIMFとの間で2003年1～8月を対象期間とする暫定融資プログラムに合意。これによりアルゼンチンはIMFに対し債務不履行に陥るのを辛うじて免れ、世銀及びIDBに対する延滞債務も正常化した。しかし、この結果IMFとの本格的な支援交渉は5月25日に就任する次期大統領に委ねられ、新政権にとって発足後直ちに取組まなければならない最重要課題の一つとなった。

暫定融資プログラムの対象は、IMFに対し2003年1～8月に返済しなければならない金額に見合うスタンドバイ・クレジット約2,980百万ドルと、同期間に期日が到来するが1年間の支払い猶予を受けることになる約3,800百万ドルの合計約6,780百万ドルであり、新規の資金供与は行われない。尚、暫定融資プログラム合意にあたって当面の経済目標が定められ、達成状況について3月、5月、7月にIMFのレビューを受けることになっている。3月のレビューでアルゼンチンはすべての数値目標を達成し、3月19日のIMF理事会で承認された。

「大統領選挙について」

党内で派閥間の激しい駆け引きが続いていた正義党は、

1月24日の党大会で党内予備選挙実施の中止と同党大統領候補は複数で直接4月27日の本選挙に臨むことを決定した。3月10日には大統領選挙への立候補受付が終了し、22組(実質19組)が正副大統領立候補の届け出を行った。

IPSO社が3月21～24日に実施した世論調査では、Menem元大統領の対抗馬としてDuhalde現大統領の後ろ盾を受けた正義党のKirchner候補が支持率を21.2%に上げて1位に付けているが、Adolfo Rodriguez Saa(正義党、15.8%)、Carlos Menem(正義党、15.0%)、Elisa Carrio(ARI党、12.5%)、Ricardo Lopez Murphy(Recrear Argentina、11.6%)の4名も10%を超える支持率を維持しており、5月18日に行われる決選投票に纏れ込む可能性が高いと見られている。

「為替市場動向」

1ドル=3.3ペソ台で年末越えした為替市場は、1月16日のIMFとの暫定融資プログラム合意により8月まで国際金融機関に対する債務返済の目処が付いたことを受け、その後もペソ強含みの展開となった。インフレが沈静化していることに加え、穀物輸出をはじめとするドル売りに対しドル買い需要そのものが低調に推移しており、3月20日の米国の対イラク武力行使開始にも影響されず、3月24日には昨年5月2日以来の1ドル=2ペソ台に戻した。政府当局としては経済活性化のための輸出促進と輸出税による税收確保の見地からペソが必要以上に上昇することは避けたいところであり、昨年12月以降数回に亘りペソ相場上昇局面で為替規制の緩和を実施してきたが、今のところ効果は現れていない。前倒しで凍結解除された預金もとりあえず様子見の姿勢でそのまま滞留し、ドル買いに向かっていない模様。3月27日には1ドル=2.88ペソまでペソが上昇した。

「為替規制の緩和」

ペソが強含みに推移する中、中銀は昨年末に実施した為替規制の一部緩和を皮切りに、それ以降も取引規制を徐々

に緩めてきている。主な概要は次の通り：

- ・1,000千ドルを超える輸出為替は中銀に売却する(従来200千ドル)
- ・一部消費財輸入について、90日まで前払いを認める
- ・外国為替取扱金融機関は、外部監査法人の承認を得た決算に基づく配当・利益送金を受け付けることができる
- ・金融機関の外貨持ち高の上限を資産の6%から8%に引き上げ、更に10%に引き上げ
- ・金融機関を除く民間部門の期日到来した金融債務の返済額上限を月間150千ドル相当から300千ドル相当に引き上げ、さらに月間1,000千ドル相当に引き上げ
- ・2001年12月31日時点の残存元本が3,000千ドル相当を超えない債務で返済期日が到来したものについての返済を認め、更に対象を5,000千ドル相当に拡大
- ・1社(1人)当りの外貨購入上限を従来の月間150千ドル相当から200千ドル相当に引き上げ、更に月間300千ドル相当に引き上げ
- ・3月13日から4月15日まで、財の輸入債務について期限前決済を認める

「ドル預金のペソ化に対する違憲判決と凍結定期預金の解除」

最高裁は3月5日、サンルイス州政府の定期預金247百万ドルをペソ化したことは財産権の侵害であり、憲法違反であるとの判決を下した。この判決は全てのペソ化預金を対象としたものではないが、今後この司法判断を踏まえたペソ化預金の再ドル化の判決が頻発する可能性がある。

尚、3月27日、ラバーニャ経済大臣は凍結定期預金(所謂Corralon)に対する引出制限を全面的に解除すると発表した。ペソ化された凍結定期預金の解除方法については、原通貨のペソ換算額(1.40ペソ/ドル)にインフレ調整を行った金額が支払われ、実勢相場との差額は10年物ドル建国債が発給されるが、42~100千ペソの預金については一旦90日の定期預金に、100千ペソ以上の預金については120日の定期預金に切り替えた上で、その期日に引き出し可能となる。

「2002年の経済成長率マイナス10.9%」

3月19日の国家統計調査院発表によると、2002年度の実質GDP成長率はマイナス10.9%となった。政府は-11%を見込んでおり、ほぼ予測通りの結果であった。尚、報道によると、2002年度は過去50年間で最大のマイナス成長を記録したことになる。

2003年度については、IMFとの暫定融資プログラム合意にあたって2~3%のプラス成長を当面の政府目標としていたが、その後の政府予測では、景気は底を打ち4.2%のプラス成長に転ずるとの見方を示している。

「鉱工業生産」

国家統計調査院の発表によると、2002年度の鉱工業生産

指数は通年で前年比-10.6%と大きく落ち込み、1994年に同院が統計を開始して以来最大の下げ幅を記録した。中でも自動車業界は前年比-33%と大幅に落ち込み、同業界の生産水準は60年当時とほぼ同じ水準になったと伝えられている。尚、2003年に入り前年同月比で1月は16.6%、2月は17.4%上昇、前月比(季節要因調整後)では昨年8月から7ヶ月連続でプラスを記録しており、一部の業界では昨年のペソ切下げにより輸入品が割高となった分、国内生産にシフトする動きが出てきていると考えられ、景気は底を打ったとする向きがある一方、3月に行われた景気見通しに関するアンケートでは、45.9%の企業が国内需要は現状維持と回答しており、未だ需要の回復には慎重な見方を示す企業が半数近いことを示している。

「2002年度国際収支」

国家統計調査院の発表によると、2002年の輸出は為替の大幅切り下げにもの拘らず前年比-4.8%の25,346百万ドル、輸入は国内経済の低迷と輸入価格の大幅上昇により前年比-55.8%の8,988百万ドルに激減し、貿易収支は16,358百万ドル(前年比+160%)の過去最高の黒字を記録した。この結果、経常収支は前年の4,483百万ドルの赤字から一気に8,954百万ドルの黒字に転じ、総合収支も12,083百万ドルの赤字から4,516百万ドルの赤字に縮小した。尚、資本収支は前年の4,568百万ドルから11,438百万ドルに赤字が拡大した。

「インフレ率」

国家統計調査院発表の消費者物価上昇率は1月1.3%(前年同月比39.6%)、2月0.6%(同36.1%)であった。3月も1%に満たない上昇率が見込まれている。

2003年度のインフレ率については、IMFとの暫定融資プログラム合意に際して35%以内を目標に掲げ、予算編成に当たっては22%程度を見込んでいたが、今般、ラバーニャ経済大臣は14%程度になるとの見通しを明らかにした。1~2月の上昇率が1.9%に留まっていることから下方修正したものの。

「低所得者層・貧困層が増加」

国家統計調査院の発表によると、不況と物価上昇により、2002年10月現在の都市部の低所得者層(大人2人子供2人の平均的世帯の月間収入が716.17ペソ未満)の人口比率が57.5%となり、この1年間で19.2%増加、貧困層(大人2人子供2人の平均的世帯の月間収入が324.06ペソ未満)については27.5%に達し、1年前の13.6%から倍増した。全国レベルでの低所得者人口は20百万人を超え、貧困層人口は10百万人程度に膨らんだと推測される。

(しおみ けんいち、東京リサーチインターナショナル研究理事)

友好70年 長田小学校とアルゼンチン

東武線の動物公園駅から車で20分、広がる田園地帯の中にその小学校はある。この小さい町の小学校が、まだ見ぬ遠い国アルゼンチンと、どうしてこんなに長くどうしてこんなに深い付き合いをするようになったのだろうか。

話は、嘉永・安政時代にさかのぼる。1853年、黒船来航に腰を抜かささんばかりにうろたえた江戸幕府だったが、それでも日米会談に応じることになった。この時幕府が会談の記録役に選んだのが、関宿藩の右筆野本作次郎氏である。関宿(せきやど)藩は、利根川と江戸川の合流地点一帯を治め、太平洋と江戸を結ぶ水上交通の要として栄えた。藩の右筆は、船の往来に関する知識では抜きん出たのである。

時は下って1933年、ペリー提督の孫が日本を訪れる機会があり、作次郎氏の孫との対面も実現した。このニュースを知ったアルゼンチン臨時代理公使のモンテネグロ氏は、関宿を訪れて野本さんの孫に会うことを決意した。彼の祖父もまた、ペリー艦隊の一員として浦賀に滞在し、「ノモトというサムライに世話になった」と幼い頃から祖父に聞かされていたのだが、この時まで「ノモト」の手がかりがつかめなかったのである。

今から70年前のことである。初めて外国の使節を迎える村は大騒ぎであった。当時としては珍しい乗用車でくるアルゼンチン外交官のために、砂利を敷き詰めるなど総出で道普請をした。この村と人々を深く愛したモンテネグロは、ポケットマネーで集会所を寄贈したり、育英資金を提供し続けたりし、彼とこの地の付き合いは、ずっと続いた。

第二次大戦で途切れた関係は、1965年、アルゼンチン大使の友好再開の呼びかけで復活した。この時は、日本に寄港したアルゼンチン海軍練習艦リベルタ号の士官たちが、東京晴海からはるばるこの町を訪れてきた。

15年前から、小学校では、毎年「アルゼンチンの集い」を校内行事として開いている。全校児童が、原語のスペイン語でタンゴ「カミニート」を斉唱するのである。その素

晴らしい発音には驚かされる。音楽の先生がCDを聴かせながら教えているのだという。2年前からフォルクローレの「サンバ・デ・ミ・エスペランサ」がレパートリーに加わった。遠い異国のあどけない児童達の澄んだ歌声に、訪れるアルゼンチン外交官夫人らが目頭を押さえながら聞き入っている。

メネム大統領は、日本を公式訪問したとき、日ア修好100周年を祝う晴れがましい式典にこの児童達を招待した。児童達の「カミニート」に応じて大統領が贈ったアルゼンチン国旗は今、この小学校の宝物である。

この地は今、茨城県猿島郡境町になっている。学校は長田小学校という。今年は、モンテネグロとの交友が始まってから70周年に当たる。6月の「集い」は、いつもよりもっと立派なものにしたいと、先生や児童の練習に熱が入っている。

(河崎 勳)

関宿(せきやど)ツアーのお知らせ

日本アルゼンチン協会では、長田小学校の「アルゼンチンの集い」に合わせて、6月7日(土)に、関宿の歴史をたどるツアーを予定している。

長田小学校の「集い」に出席したあと、野本邸の一角にあるモンテネグロ館で往時を偲び、近くにある関宿城と鈴木貫太郎記念館を見学する。鈴木貫太郎は、関宿出身。日本海海戦の直前アルゼンチンが日本に譲渡した軍艦2隻を、日本海軍を代表してイタリアで受取って横浜まで回航し、この軍艦が海戦で大活躍した。鈴木は、終戦時の総理大臣。

ツアー参加料は無料。交通費、弁当代等の実費は参加者負担。問い合わせは当協会事務局へ。

「旅の指さし会話帳 ④〇 アルゼンチン」について

著者：谷本雅世、情報出版局

この本はいわゆる文法書ではなく、旅先でぶっつけ本番でも現地で美味しく楽しくときには現地の人々との話題づくりに一役買えるようなテイストを分り易いイラスト主体で紹介した小冊子です。堅苦しく机上で勉強するようなスペイン語ではなく、街角で道を尋ねる一言や、あいさつ・自己紹介、そして世界遺産や郷土料理などアルゼンチンならではの独自性を生かしています。気軽にパラパラとめ

くっていただき、アルゼンチンの様子、人となりや文化にすっと馴染めるよう、工夫を凝らしてみました。本の後半には現地で役立つ単語集や主に首都・ブエノスアイレスでの文法についても解説しています。

まずはお手にとって目を通して見てください。アルゼンチンは日本からは遠いですが、文化・自然・民族等たくさんの魅力をもった大きな国であることが実感されるでしょう。

アルゼンチン、ブエノスアイレスの風 <http://www.tanimon.com.ar/>



インタビュー：この人

エルナン・J・コラチ

ペロン党青年部代表

外務省の青年リーダー招聘で来日したペロン党青年部代表エルナン・ホセ・コラチ氏と3月7日、協会理事長および理事が帝国ホテルで懇談した。ペロン党青年部は政界を志す若手の登竜門で、若き日のペロン大統領、メネム元大統領など多くの政治家が青年部で政治活動を始めた。また、同氏の父親カルロス・コラチはメネム政権時代の内務大臣として知名の政治家であった。

— 100年以上に亘るアルゼンチンと日本との関係は、2隻の戦艦モレノ（日進）とリバダビア（春日）の日本への譲渡、戦後窮乏時代の日本に対するエバペロン財団からの大量の援助物資など友好の歴史です。昨年、丸の内仲通りからアスファルトが撤去され、アルゼンチンの斑岩が貼り付けられ、風格のある「カミニート」に変貌しました。

「日亜関係を説明いただき有難う。帰国する前に是非、丸の内仲通りを歩いてみたい」

— ペロン党青年部は党内でどんな位置づけなのですか。

「ペロン党内には、労働組合、婦人部会、青年部、政治家部会の4つの部会があり、青年部では政治家を志向する青年が活動していて、私は代表を務めています」

— アルゼンチンは90年代、マクロ経済政策、構造改革、国際化、民営化など、開発途上国の中で成功事例として国際的に注目を集めたのですが、どうして今回の未曾有の経済危機に陥ったのですか。

「少し歴史を遡って説明しなければなりません。83年に軍政から民政への移管が実現、アルフォンシン（急進党）政権が発足し、政治の安定には成功したけれど、経済政策は失敗、構造改革は進みませんでした。89年に誕生したメネム政権（ペロン党）は自由化、構造改革、経済の国際化などを推進、経済の安定と成長に成功しました。しかし、97年のアジア通貨危機、98年のロシア金融危機、99年のブラジル通貨切下げなど外的要因がアルゼンチン経済を直撃しました。在アルゼンチン企業のブラジルへの拠点移管、対ブラジルでの競争力低下、対外債務の負担が表面化しました。99年のデ・ラ・ルア政権（急進党）は国の進むべき道を示さず、間違っ



政策の結果、信認を失い政治の安定が崩壊し、経済危機へと転化しました。現デュアルデ政権（ペロン党）はナショナリズム、ポプリズムで正しいビジョンを持っていないと思う。今の相対的な経済の安定はみせかけの安定です」

— 貴方の考える正しいビジョンは何ですか。

「国際化、自由化などメネム元大統領の示すビジョンです。今回の経済危機で大きく打撃を受けたのは中低所得層で、その人たちはメネムを支持しています。私もメネムを支持します。政治改革をしなければなりません」

— 4月の選挙でメネムが大統領に再度就任したら、カバロ元経済大臣を閣僚にするでしょうか。

「それはありえないでしょう。経済大臣はムルフィーでしょう」

— ご承知の通り、サムライ債（円建てのアルゼンチン国債）が債務不履行となり金利支払、元本償還が止まっています。サムライ債の投資家は年金生活者や主婦が多く、日本の低金利を考えれば、金利削減は受け入れやすいでしょう。しかし、リスク認識では個人投資家と機関投資家は大きく相違していて、仮に元本削減となれば受けるショックは大きく、個人投資家がアルゼンチンに投資することは将来期待できなくなるでしょう。どうお考えですか。

「よく分かります。対外債務履行の責任はアルゼンチンにあります。対外債務のアドバイザーが決定したのでこれから話し合いが始まるでしょう。対外債務問題はラテンアメリカの文脈の中で国際金融の問題として対処することも必要でしょう」

（文責）小林晋一郎

サルミエントと福沢諭吉

「脱亜入欧」 共通した近代教育の推進者

松下 マルタ

アルゼンチンを訪ねた経験をお持ちの方なら、サルミエント(1811 - 1888)という名前を一度は耳にされたことだろう。全国の町々には、彼の名を冠した通りや公園が数多く存在するし、首都のブエノスアイレス市には有名なコリエンテス通りに平行してサルミエント通りが走っている。もっとも、街路や公園にその名をとどめている人物は、独立の英雄サンマルティンをはじめとして他にも沢山いる。だが、サルミエントだけしか享受できない栄誉がある。「教育の父」という称号がそれである。彼の命日9月11日は「教師の日」として現在でも各学校で祝われているし、その日には生徒は先生に贈り物をする事になっている。



日本の先生からすればなんとも羨ましい話だが、そんな栄誉に浴しているのはサルミエントが生涯を通して普通教育の普及に全力を傾け、教育面で多大な貢献をしたからである。では、何故サルミエントは、教育の普及に腐心したのであろうか。

その最大の理由は、彼がスペインから受け継いだアルゼンチンの後進性を野蛮と見なし、教育によって、その打破=文明化を企図したことにあった。同時代人の法学者アルベルディは、アルゼンチンの後進性をパンパの広大な土地が未開拓であることに求め、ヨーロッパ移民によってパンパを開拓すべきだとして、「統治とは植民なり」という有名な言葉を残したが、サルミエントにあっては、「統治とは教育なり」だったのである。つまり、国民すべてに教育を施すことによって、アルゼンチンの要素を除去し、文明化=ヨーロッパ化を実現するというのが、彼の教育論の中核だったのである。端的に言えば、「脱亜入欧」こそ、かれの目標だったのである。

こう述べてくると、何故私がサルミエントと福沢諭吉(1835 - 1901)を比較しようとしたかその意図がお分かりいただけるだろう。改めて指摘するまでもなく、亜の意味するところは違うが、「脱亜入欧」は福沢の目指したところでもあったからである。もっとも、福沢が「脱亜」を志向したとしても、「入欧」とは言わなかったと

いうのが本当のようだが、ともあれ、日本のなかに残存するアジア的後進性、とくに、封建的身分制度を敵視し、文明化によってその打破を目指した点ではサルミエントと酷似していた。また、教育の意義を認識していたことも両者の共通点といってよい。

しかしながら、両者の間には違いも多かった。普通教育が分別ある市民を育て、また、様々な技術の習得を可能にし、社会発展に資すると見た点では両者は共通していたが、高等教育の評価については決定的に異なっていた。サルミエントが貧者にも高等教育の門戸を開き、教育による社会的流動性を高めようとしたのに対して、福沢は高等教育を少数のエリートに限られるべきだとした。それは、既存社会に不満を抱いている貧者が高度な学問を身につけると、同時に反抗する術も習得することになり、社会をむしろ不安定しかねないからであった。

このように、福沢にあっては、文明化の必要性を説きつつも、それが社会の安定を覆すことがあってはならないという姿勢が顕著であった。このことは、福沢が文明化よりも、国の安定あるいは発展により高い価値を与え、文明化はそのための手段と考えていたことを示唆している。これに対して、サルミエントにあっては、文明化そのものが目標であった。こうした違いは、福沢が外資による発展は、国の植民地化を招来するとして反対したのに対して、サルミエントが文明化に役立つとしてそれを支持したことにも示されていた。要するに、福沢が文明化を国家発展のひとつの重要な手段と見なしたのに対して、サルミエントはそれ自体を目標とみなしたのである。

こうした事例をはじめとして、両者には相違点も多く、その違いは日亜のその後の歴史の歩みともかかわっているように思うのだが、詳しくは拙著をご参照いただけたら幸いです。

(まつした マルタ、同志社大学教授、当協会理事松下洋神戸大学大学院教授夫人)

Sarmiento y Fukuzawa :

Dos forjadores de la modernidad
Universidad Nacional de Matanza, San Justo
2002, pp.230

Marta de Matsushita

新刊紹介 (2)

抱きしめて タンゴ

本場でタンゴを究めた赤裸々な自叙伝

香坂 優

1990年のある日、当時師事していた故淡谷のり子先生が、シャンソンのレッスンを受けていた私の顔をのぞき込むようにして「あなたシャンソン歌ってておもしろい？」と、私に聞いた。そして言った。「あなたの声には、やっぱりタンゴが合うわ。アルゼンチンタンゴを歌いなさい。嵐子ちゃんが引退するようだから、代わりにやりなさい。」そして、さらに続けて先生は言った。「タンゴを歌わないなら、歌手を辞めるのね！」・・・と。

嵐子ちゃんとは、藤沢嵐子さんのことである。

振り返ってみれば、この先生の言葉で、私の人生は大きな転換期に入ることとなった。私には離婚歴があり、その頃一人娘は中学生になっていた。毎夜、ライブハウスやクラブで歌う母親を持った娘は、小学生の頃より鍵っ子でひとり淋しく夜をすごし、そんな娘に心で詫びながら、それでもなお歌への夢を捨てられない自分の現実と夢との葛藤に苦しんでいた頃であった。

私は、名古屋で生まれた。3歳にして地元名古屋のラジオ番組「子供のど自慢」に優勝以来、放送局の児童合唱団に入り、その後青春時タレントとなりテレビラジオで週7本のレギュラーを持つ売れっ子になった。東京へ進出しCMソング、キャラクター、シャンソン歌手という経歴を持っていたが、私はすでに40歳であった。新しいジャンルへの挑戦は、無謀というほかない。ましてや、成熟文化の極みともいえる、難しいジャンルのアルゼンチンタンゴである。しかし、自分の人生に妥協はしたくなかった。又、結婚にも失敗し、人生は思い通りにならない苦しいものという失意のどん底にあった。私が夢を捨てず、夢を追い続け挑戦することで、娘も勇気を持ってまっすぐに育てあげることが出来るのではないかと考えた。

翌年、私は淡谷先生の推薦を受けて、アルゼンチンの第二の都市、コルドバの州政府主催のコンサートに出演するためアルゼンチンへと旅立ったのである。

初めて触れる本場のタンゴのカルチャーショックは、相当なものであった。私は、歌手としての自分の無力さに気づき、さらに歌に励まされ、音楽によって生きる勇気を与えられている人々がいる国を知り、それまでの自分の価値観が崩れてゆくのを止めることが出来なかった。本物を



2002年10月南アフリカ共和国で行われたジャパン・フェスティバル邦楽(琴/尺八)の伴奏でラ・クンバルシータを歌う



知ったからこそ、気づかされた命の尊さ。歌手の使命は娯楽のための人気者という役割だけではないはず。どうしてもタンゴの勉強がしたいと悩み抜いたあげく、私は娘を一人残して、毎年のように2~3ヶ月ブエノス・アイレスに行くことになったのである。娘と細々と暮らす私にとって、資金の準備も容易なことではなかった。

単身留学の異国での幾たびかの挫折を乗り越え、娘との確執も何もかもよく話し合い、私の夢と挑戦を理解して貰うことで、娘は私の一番の理解者になっていった。

大きな目標を持てば、小さな目標は知らず知らずのうちに達成されてゆく。私が、アルゼンチンタンゴに挑戦するという大それた事を貫こうとすることで、娘が自立し育ててくれた。私自身がタンゴに支えられ、タンゴに抱きしめられて、自分との対話を繰り返し、結果自分の運命と宿命を感じていく自分探しの旅となったのである。

私は、いつも霊的な直感を大切にしてきた。人は、必ず自分の思っている通りの人間になる。強く求め努力すれば、必要な事は必ず丁度良い時期に引き寄せられてくる。

半自叙伝エッセイという形で、ブエノス・アイレスでの体験や今までの崖っぷちともいえる私のタンゴ人生を、出版社の要請に応じて自分で400字詰め原稿用紙300枚を書き終えた。歌手として、日本の芸能界にどっぷりと浸る選択をとらなかったからこそ、新たな経験から自分の頭で考え抜き、そのことで知恵が生まれ、価値観を作りあげることができたのではないだろうか。そして、心が燃えた。心が燃えることでさらに挑戦することができた。人生の真の喜びは、生きていくことに心が燃えるということが、実は最も具体的な人生の生きる喜びなのである。

「抱きしめて タンゴ」の本の発売に合わせて、同じタイトルのイメージソングも出来た。私の初めてのオリジナル曲である。

(こうさか ゆう タンゴ歌手 当協会会員)

抱きしめて タンゴ のお問い合わせ

主婦の友社

101-8911 東京都千代田区神田駿河台2-9

宣伝部 03-5280-7577 (FAX 5280-7578)

出版部 03-5280-7537 (FAX 5280-7437)

オフィス・香坂優

152-0032 東京都目黒区平町2-12-17-301

03-5701-5778 (電話・FAX 同)

「優の会」

152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-19-301

シーエムシー内 03-5726-2462 (FAX 5729-2061)

南極圏到達記

新鮮な感動と感激を取りもどすアドベンチャー

森山秀雄

2003年2月12日朝6時、私は、南緯66度33分の南極線を越えて南極圏に入った。そして朝10時頃には更に200 kmも南下したデーテイル島に上陸した。

この島には50年程前に放棄されたイギリスの基地があり当時の生活をそのまま残していた。ここは南極点から1,900 km、南極点を中心に円状に広がる平均海拔2,000メートルの白い南極大陸と、海との接点に当り世界各国の南極観測基地のほとんどはこの緯度に位置している。

デーテイル島は西側に位置するが、反対側の東には、日本の昭和基地がある。

6日前にウスアイアからドイツのクルーザー、ハンセアテック号に乗船して、とうとう念願の南極圏に到達したのである。

ハンセアテック号は9,000トン弱で、客船としては小ぶりだが、船の鋼板が厚く80 cmくらいの氷に閉じ込められても5ノットで自力航行できる性能があり、南極と北極の夏季専用世界唯一のファイブスタークルーザーである。

乗客110人に対して、乗組員は127人で、乗客の中にはドイツテレビの取材班3人がおり、乗組員の中には、ウクライナからの4人編成のバンド、ルーマニア人のギター弾き、カナダ人女性ピアニスト、ポーランドの女性歌手とミュージシャン7人も乗り組んでいた。

以下は簡単な旅日記である。

2月6日 16時30分、ウスアイア港にてハンセアテック号に乗船。乗客の85%はドイツ人、15%はスペイン、ギリシャ、メキシコ、チリ、アルゼンチン人で、日本人は家内と私の二人のみ。船内の公用語はドイツ語とスペイン語で、私達夫婦は計16人のスペイン語組に入った。

17時30分、安全に関する説明会、全員で救命具着用の練習。18時30分出帆。川のように狭いビーグル海峡の両岸に移り行く風景を楽しみながら静かに航行。約1時間もするとビーグル海峡の幅が広くなりゆれを感じ始める。外気温9度C。19時30分マルコポーロ レストランで夕食。乗船前にウスアイアで船酔い防止用の薬を服用していた家内は食事中に睡魔におそわれて元気なし。

2月7日 7時30分起床。海は黒く空は白い。外気温7度C。船室の窓からは翼を拡げると3メートル半にもなる純白のアルバトロが飛んでいるのが見られる。8時30分マルコポーロ レストランで朝食。新鮮な野菜果物、パンと肉類、なんと豊富でぜいたくな事か！ 11時 コロンブスラウンジで説明会。島、半島、氷塊へ上陸する際に使用す

る防寒ジャケットとゴム長靴のサイズの選定と配布。上陸用舟艇10人乗りソジアグの所在場所確認。15時、150人は楽に収容できるダーウインホールで説明会。上陸中の行動、動物との接し方、動植物、地質等に関してスライドを見ながら専門家から説明。上陸中天候急変の場合の避難対処方法の説明。18時30分、船長主催の歓迎晩餐会。婦人達は宝石をつけて美しく着飾り男性はタキシードで正装。長身のドイツ人の谷間で我々夫婦が短身を嘆いても仕方なし。話してみると世界中を旅行している人が多く、日本を知っている人も少なかった。我々夫婦だけが日本人だったせいか、親近感を持って対応された。船客の平均年齢は六十才くらいだろうか。料理はとにかく豪華で豊富、高品質、何を食べてもおいしい。魔のドレーク海峡が全くウソの様に静かで船はほとんど揺れない。

2月8日 7時頃目覚めて船室の窓のカーテンを開けると真白な流氷がいくつも目に入った。ウスアイアを出港して一日半、いよいよ南極半島に近づいた様子。9時30分、南極圏に生息する鳥に関する説明会。11時30分、鯨が潮をふいたり、尾を空中に投げだしたりする光景が見える。船はエンジンを止めて鯨観察をサービス。ドイツのテレビ班も懸命に撮影。

外気温4.5度C。13時、最初の上陸地点、南緯62度のペンギン島に接近。500メートル程の沖合いに錨を下ろして先遣隊が上陸用舟艇で島を偵察。上陸場所を確保して15分程で本船に戻ってきた。13時30分、10人ずつ上陸用舟艇に分乗してペンギン島に上陸を開始。全員赤い防寒衣とゴム長靴のいでたち。上陸後300メートル程の火山山頂まで約4 kmのトレッキング。ペンギンとアザラシに近づくすぎない様に観察。海岸には鯨、アザラシの白骨がいたるところに散在。溶岩を踏みわけて一列に並んで登山。外気は零度くらいか、山頂の風の勢いは猛烈だ。海辺ではペンギン、アザラシがいたる所で生息し人を全く恐れない。17時、南極海峡を通過してポーレット島に向けて出港。南極海峡は進むにつれて15階20階のビルほど高く数百メートルもある氷山が次から次へと現れる。荘厳な美しさに圧倒される。鯨は方々に目撃されイルカは群をなして海面を飛ぶ。時々雲間から陽がもれると、真っ黒な海が紺碧に美しく輝く。

2月9日 明け方、船が氷山に接触して目を覚ます。こすったらしい。6時起床、どこを見渡しても巨大な氷山又氷山。8時、ウエルデ海のポーレット島沖合いに投錨。9時半上陸開始。ペンギン、ペンギン、ペンギンばかりの島。12時30分コロンブスデッキでバーベキュー。外気温は0度に近いから焼きあがるそばから、肉を奪うようにして皿に

盛り室内に駆け込んで食事を楽しむ。15時、鬼が島 (Devil Island) 着。遠浅らしく本船は2 kmも離れて錨を下ろした。氷山の上に遊ぶペンギンは絵の美しさそのものだ。

2月10日 午前8時、リビングストーン島のハンナンポイント沖で投錨。ブランスフィールド海峡を通過中、結構揺れを感じた。波が高くて船客が上陸用舟艇に乗り込む際に危険が大きかった為、ハンナンポイント上陸は中止された。そのままデセプション島に向けて出航。

10時半、デセプション島沖で投錨。60年前に閉鎖されたノルウエーの鯨基地の残骸が放置されている。火山島のせいか動物は少なくペンギンとアザラシが少数生息している程度。砂浜を手で掘るだけで温水が溜まる。船員がスコップで直径3メートル、深さ50 cm位の湯溜りを作り冷たい海水を入れて適温にすると、南極での露天風呂が出来上がり。

防寒着の下に水着を用意していた10人程の男女が次々に温泉につかった。体が熱くなると氷同様の海水にとび込む船客まであった。どうみても若くて張りのある肉体とはいえない人々なのに何と元気のいいことか!

2月11日 一晩中、一気に南下して朝8時頃パラソ湾に投錨。甲板には約5 cmの雪が積もっていた。アルゼンチンのアルミランテ ブラウン基地に上陸。ここ数年予算不足でほとんど使っていないらしく無人。40 cmくらいの雪をかき分けて300メートル程の小高い山頂に立つ。沖合い遠くに

ハンセアテイク号が氷海にたたずんで見える。下りはビニールシートを尻にしいて一気に滑り下りるから簡単であった。基地から上陸用舟艇に乗ってパラソ湾めぐり。流水のすき間に水面を探しながら進み、切り立った島の風景や海鳥を観察する。ミンク鯨が一頭、舟艇の周辺を潜ったり浮かんだり、時々潮を吹いたりしながらジャレている。手を伸ばせば届くようなわずか2~3メートルにまで近づくので、初めのうちは乗っている舟艇が鯨に転覆されるのではないかとヒヤヒヤした程だった。午後1時頃からレマイル水路に進入、幅わずか100メートル程、峻立する岩盤と氷山に挟まれた天然の水路である。

2月12日 一晩中、南に向けて航行を続け朝6時頃南緯66度33分の南極線を越えて南極圏に入った。これまで見てきた光景よりも格段に厳しい氷の世界だ。ハンセアテイク号は巨大な氷山の間に水面を見つけて流水をかき分けながらゆっくりと航行する。氷が船の鋼板とぶつかるガラガラとした音を感じる。いよいよ南極圏に入ったのだ。

これが南極だとさわやかな興奮を感じないわけにはいかなかった。

朝8時過ぎに東京の長女とニューヨークの次女から衛星電話が入った。昨夜ファックスで今朝南極圏到達を予告しておいたのだ。電話で会話をしながら家族4人で南極圏到達を祝った。

2月13日 船はデーテイル島から反転して北上を始め約20時間航行してピーターマン島の沖合いに投錨。

2月14日 9時過ぎメルチオ島。午後ホーン岬に向けて出航。

2月15日 ドレーク海峡を一日中航海。往路とは異なり大荒れでこれが魔のドレーク海域かと実感。船は木の葉の様に揺れる。手すりにつかまらなると立っては歩けない。昼食中、家内と他に何人かの客がイスごと床に投げ出された。皿が、グラスが、ボトルが投げ飛ばされ、ガチャン、ガチャンとわれた。さすが客船でそれでも昼食は中止にならず、油を使う温かい料理がメニューから外されただけである。

2月16日 ほとんど寝つかれないまま朝を迎えたが揺れはいく分弱くなった感じ。家内はこのまま船といっしょに海に沈んでしまうのではないかといて不安を隠せなかった。

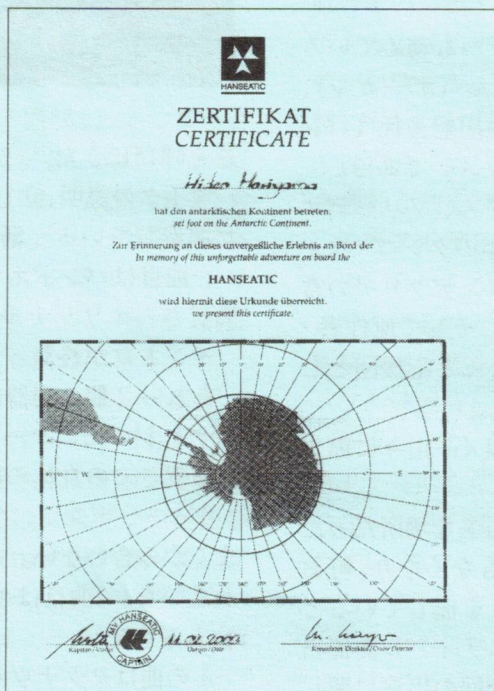
後程アナウンスによると、昨晚は風速90ノット、波高15メートルで船橋の高さ12メートルを上まわり、12段階に分類されるシケの状態の11段階であったとの事だった。昼過ぎケー

ブ岬の沖合いに投錨して上陸。有史以来15,000人の船乗りの命を飲み込み魔のドレーク海峡として恐れられたホーン岬の記念碑に詣でた。夕方にはビーグル海峡に入り、船長主催のお別れ晩餐会が催された。正装の紳士淑女達は10日間の運命共同体の生活ですっかり打ち解け別れを惜しんで記念撮影をするグループがいくつも見られた。

船長のスピーチによると、天候が急変する南極圏では、余程の気象条件に恵まれない限り、デーテイル島までは南下できないとの事で、ハンセアテイク号は1993年就航して以来、これが初めての快挙であったと云って喜んでいった。

2月17日 朝、ウスアイアでの下船を前に、ハンセアテイク号でPolar Circleを超えて南極圏に入った事と南極大陸を踏んだことを証明する二枚の証明書が船長の署名入りで届けられた。

(もりやま ひでお、在ブエノスアイレス ガセイ社長)



南極大陸を踏んだ証明書

熱狂のコスキン・フェスティバル

本場の舞台上でバンドネオン演奏

小川 紀美代

今回の旅の大きな目的のひとつは、フォルクローレの祭典、コスキンフェスティバルへの出演である。

このフェスティバルへの出演は、アルゼンチンの演奏家、ダンサーの一大チャンスの場でもある。

例えば、フェスティバルの象徴になる舞台や町中にはられるポスター、パンフレットを飾る絵もコンテストがあり選抜されるのだという。

そんな場面に、日本から参加するというのは、大変な名誉でもあり、嬉しいという気持ちと同時に責任も感じる。

バンドのメンバーは、この旅のリーダーも務めている瀬賀倫夫さん（ギター）、目黒良子さん（ボーカル）、佐藤貴和さん（ボンボ）、そして私・小川紀美代（バンドネオン）の4人、「ラス・パルメーラス」である。

そして、新潟からはスタッフ・二宮さん、フリーディレクター・高岡さん。東京からは、長年のタンゴ・フォルクローレファンで、今はなき六本木カンデラリアの常連でもあった漫画家・高井研一郎さん、そして原作者・中原まことさん、編集者・大沢さんがなんと応援団として同行している。

ここ、コスキン市は、とても環境が良く、山々に囲まれ、空気がとてもいい。

昔は肺結核の療養所として世界的に有名な場所だったが、抗生物質が開発されてから療養所もなくなり、町おこしとして43年前からフェスティバルを催しているという。日本人の実行委員として、フェスティバル開催当時から尽力されている水溜さんには、今回の出演に関して色々お世話になった。

1月19日。本番の時間は遅い。

フェスティバル開催時間の夜10時に合わせて楽屋入りするという。私達の出番は11時、の予定。

楽屋があるということで案内された。

そこはステージのすぐ裏で、たくさんの演奏家やダンサーが待機している。

その熱気はともかく、窓がないので、とにかく暑い。本当に暑い。40度は軽く越しているのではないか。

汗だくになりながらも着替え、顔をあわせる演奏者やスタッフと片言で話す。

昨日観客席から見たその舞台は、広い舞台が三層に仕切られていて、つぎつぎと出演者が出られる仕組みになっている。

しかし、音あわせ、PAのチェックはいっさいなし。

この数の多さで混乱しないのだろうか？と不安がよぎる。実際、昨日のステージでは途中からマイクが入る、ということがしばしばだったのだ。

予定時間11時を過ぎ、しばらくするとスタッフが私



達を呼びにきた。

マイクの説明、立ち位置を指定する。前のバンドがまだ演奏している。緊張するまもなく出番がきた。

一曲目はバンドネオンソロからはいるチャカレーラ。瀬賀さんオリジナルの編曲である。

イントロが終わってリズムがはいる。

あれっ？他の楽器の音が良く聴こえない。どうやら、ステージのモニターがうまく働いていないようだ。

瀬賀さんの身体の動きでなんとかリズムを合わせる。

ギター、ボンボ、バンドネオン、そしてボーカルがうまくかみ合わない。こうなったら笑顔で演奏しとおすしかないな。2曲目はギターとバンドネオンのイントロで始まるサンバ。

この曲はタクナウ家で小さい女の子が歌ってくれたこともあり、思い出深い曲だ。

こちらの緊張感とは別に、客席は盛り上がっている。

みんな手に手に自分の名前を書いたカードを持って、TVカメラに向けている。

2曲目が終わると、コスキン市長からポンチョの贈呈式だ。

ポンチョには、その地域で決まった色があり、ここコスキンでは白。一人ずつ手渡されたのだが、ここは打ち合わせどおりその場で紙袋をやぶって取り出し、上から羽織ってアンコールの演奏。

観客の声援が大きくなり、歓迎の気持ちに感謝。

と同時に、暑い、暑い。ただでさえ暑いのにポンチョをきて最後にチャカレーラを演奏。

汗まみれである。

15分余りのステージはあっという間だった。

しかし、本場のステージで演奏することは、色々な意味で本当に貴重な経験になった。

Muchas gracias! 出会ったすべての人に。

(おがわ きみよ バンドネオン奏者 当協会会員)

破産した国家での生活と将来

松本・J・アルベルト

Menem 政権時代に築かれた一つの制度（兌換法に基づくペソと米ドルの一体化した経済）が崩壊して1年半近くになる。この期間アルゼンチンは大きく変わった。2001年末、政治基盤の弱いDe la Rúa政権は撤退を余儀なくされ、アルゼンチンは事実上破綻した。

今年の1月19日、NHK-BSで「激動巨大都市 Buenos Aires-国家破産の街で」という番組が報道された。取材班は約1カ月に渡って現地取材を行い、市民生活などの状況が今のグローバル経済という観点から検証された。ブエノスアイレス市内では、夕方になると郊外から2~3万人の cartoneros という事業免許を持たないゴミ回収業者がやって来て数時間でリサイクル（販売）できる市内の紙類をはじめかなりのゴミを「回収」してしまうという映像は衝撃的だった。一方、職がない又は収入が極端に低くなってしまった人たちが作る「交換クラブ」も紹介された。市民は、手作りの「市場」と「貨幣（交換クラブのみで利用出来るチケット）」を造り、物々交換による限定的な経済活動という内容だった。普通の消費市場の中に別の「市場」を形成する試みである。

現在、世銀などの支援で実施されている国の「貧困者及び失業者対策」があるにも関わらず失業率は相変わらず18%台でかなり高い。人口の約6割近くが貧困状態に陥り、800万人近くが今の収入又は給付金では生活必需品さえ購入できない状態にいる。GDPは1千億ドルにまで落ち、個人所得も3千ドルにも及ばないとされている。累積債務は国内総生産の170%になってしまい、輸出等で得た外貨と準備金では債務の利子さえ支払えない状態である。

最近の情勢は比較的落ち着いており、失業者や年金生活者等で構成されている piqueteros の抗議デモや道路封鎖は多少少なくなっている。預金引出制限措置も緩和され、ペソの普通預金は完全に解除された。問題はドル預金だが、最高裁の判断が政治的な決着かが注目されるが、どちらの選択にしても財源の問題は解決されていない

以上預金者が満足する対策はかなり困難だとされている。海外で販売された債券も同じである。かなりの目減りが予定され、購入者の期待に応じることは非常に難しいと言える。

国が「破綻」ということは、税の徴収システム、年金等の運営制度、公的医療制度等全てが機能しなくなるということ、それまで締結した約束事や契約が履行できなくなる状態である。市民生活への直撃は想像を絶する状況になり、そのうえ、市民間と市民と政治家や指導者との信頼・期待関係が薄くなる「信頼の危機」なのである。政治不信は高くなり、制度そのものへの信頼関係が崩壊する。元々アルゼンチン人は他の南米諸国と同様、国という「体制」をあまり信用しておらず自分のことは自分で片づけるという考え方が強いが、90年代の合理的な制度構築は重要な第一歩だったのである。

今のアルゼンチンは、またこうした試みを望んでいるに違いない。ただ、以前と違って先進国の制度をそのまま導入するのではなく自分たちの現状に見合った制度を構築すべきである。Cartonerosの事業にしても、交換クラブや準通貨にしても、あえて言えばバックアップのない制度であり、今の世界では成り立たないのである。人道上一時的な措置として認めることができても、一貫性のない制度の中の「小制度」はどこかで壁にぶつかってしまい、孤立した存在になってしまう。国民はこうしたことに気付いている兆候がある。当初の制度への反対、全てのものに反対するという市民運動はトーンダウンしており、各候補者への支持動向とは別に案外4月27日の大統領選には大きな期待を託しているような気がする。史上最悪の危機からの脱出も市民の勇氣ある選択でしかあり得ないのであり、この1年半で自分たちで出来ることとやらなければならないことを十分に学んだような気がし、今度こそアルゼンチンのための制度構築の再スタートを期待したい。

(まつもと J. アルベルト 当協会理事)

春季／2003 ラテン・アメリカ「実用スペイン語」講習会開講中

リナ・B・フェラーラ先生による春季講座が始まりました。一般の方も、入会されれば会員割引の適用となります。

お問合せ：内容や難易度などについては、TEL、FAX、E-mailでどうぞ（担当：山下）

コース	時間	期間	会員受講料	一般受講料	学生受講料
1B 水曜	18:30～20:30	4/9～7/2	26,000円	36,000円	21,000円
1B 土曜	11:00～12:30	4/12～7/5	30,000円	40,000円	25,000円
2A 金曜	18:30～20:30	4/18～7/11	28,000円	38,000円	23,000円
2A 土曜	12:45～14:15	4/12～7/25	32,000円	42,000円	27,000円
2B 火曜	18:30～20:30	4/8～7/1	28,000円	38,000円	23,000円

■ 第5回「別府アルゲリッチ音楽祭」

世界的ピアニスト マルタ・アルゲリッチ、
今年は東京でも公演

5月9日(金) 12日(月) 19:00

東京・サントリーホール大ホール

5月10日(土) 16:00

東京・東京芸術大学・奏楽堂

S 12,000円 A 10,000円 B 8,000円

学生 3,000円

各プレイガイドにて発売中

問合せ：別府アルゲリッチ音楽祭組織委員会事務局
(0977-27-2299)

<http://www.coara.or.jp/~festival/>

■ アナ・マリア・ドナート

(アルゼンチン人画家)

講演会「アルゼンチン絵画の歴史と現在」

5月9日(金) 18:30

東京・上智大学中央図書館棟 L-921 会議室

千代田区紀尾井町7-1 (四谷駅徒歩1分)

入場無料・予約不要 ス페인語(日本語逐次通訳付き)

主催：上智大学イベロアメリカ研究所 (03-3238-3530)

<http://www.info.sophia.ac.jp/ibero/>

個展「人生の道」

5月12日(月)～5月17日(土)

11:00～19:00 (最終日17:00まで)

東京・アートスペース羅針盤 (03-3538-0160)

中央区京橋3-5-3 京栄ビル2F (京橋駅2番出口徒歩2分)

■ エル・タンゴ オスバルド・ベリンジェリ

5月25日(水) 11:00 14:00

大阪 ザ・シンフォニーホール

5月26日(木) 19:00 札幌 札幌コンサートホール

5月28日(金) 19:00 京都 京都コンサートホール

5月29日(土) 18:45 名古屋 テレビアホール

5月31日(日) 14:00 18:00 有楽町朝日ホール

6月1日(土) 15:00 座間 ハーモニーホール

6月2日(日) 13:30 横浜 みなとみらいホール

各プレイガイドにて発売中

問合せ：オフィス・アルファ 052-930-4333

■ サッカーキリンカップ2003

アルゼンチン代表 対 日本代表

6月8日(日) 19:00

大阪・長居スタジアム

日本サッカー協会 03-3476-2010

<http://www.jfa.or.jp/>

■ ラウル・バルボーサ (アコーディオン)

チャマメの第一人者待望の来日公演

(2日間異なる演目を演奏)

7月13日(日) 18:30

東京・青山CAY (スパイラルB1)

5,500円 (自由席・税込)

7月14日(月) 19:30

東京・浜離宮朝日ホール

S 5,000円 A 4,000円 (全席指定・税込)

【☎ 協会員は事前に下記へ申し込むと10%OFFに】

申込み：(有) アンフィニ 03-3705-4877

<http://www.infini8.co.jp>

■ ブエノスアイレス・タンゴ

アニバル・パヌッチョ&マグイ・ダニ

アルゼンチン舞踏団

パリを拠点に活動する舞踏団の初来日公演

8月1日(金) 19:00 東京・新宿文化センター

S 8,000円 A 7,000円

8月2日(土) 19:00 東京・北とびあ さくらホール

S 7,000円 A 6,000円

8月4日(月) 19:00 東京・めぐろパーシモンホール

S 8,000円 A 7,000円

8月6日(土) 19:00 神奈川・グリーンホール相模大野

S 7,500円 A 6,500円

8月7日(木) 18:30 東京・アミューたちかわ

S 7,000円 A 6,000円

【☎ 協会員は事前に下記へ申し込むとS席に限り10%OFFに】

申込み：テイト コーポレーション 03-3402-9911

<http://www.tate.jp>

■ ベバ・プグリエーセ楽団 (タンゴ)

7月12日(土) 16:00

神奈川・

グリーンホール相模大野

7月13日(日) 16:00

神奈川・横浜関内ホール

7月17日(木) 18:30

埼玉・大宮ソニックシティ

7月19日(土) 15:00 18:30 新宿文化センター

S 6,500円 A 5,500円 (全席指定7/13はSのみ)

問合せ：光藍社 KORANSHA 03-3943-9999

<http://www.koransha.com>

(担当 山下 美里)

日本アルゼンチン協会会報 40号

2003年4月20日発行

発行人 友國 八郎

編集長 横山 稔

発行所 社団法人 日本アルゼンチン協会

105-0004 東京都港区新橋1-17-1

新幸ビル

電話：03-3501-4684

FAX：03-3595-3932

Eメール：argentina@nifty.com

印刷所 株式会社 アイデア・インスティテュート